

ほのか診察室

HONOKA Consultation room

シリーズ

第99話

乳がんについて

市民病院
放射線科部長医師

阿隅 政彦 医師

監修



乳がんは、ライフスタイルの変化や食生活の欧米化などにより急増しているがんで、罹患率は女性で第1位、死亡率も第5位を占めていて、女性の12人に1人がかかると言われています。

女性特有のがんだと思われがちですが男性にも発症します。(男女比は1:99)

2014年に乳がんで亡くなった方は13,240人で1980年の約3倍に増えています。30歳代から増加し始め、40歳代後半から50歳代前半までにピークを迎えます。欧米

などでは検診受診率の向上により早期発見が増え死亡率が年々減っています。一方、日本では国が定期的な検診受診を推奨しているものの受診率は依然30%台と低く、年々死亡率は増加傾向にあります。

乳がん検診は早期に発見し治療を開始する事によって死亡率を減少させることが目的です。早期のしこりのない乳がんは、自己検診で見たり触ったり(視触診)しても発見する事が難しいため、乳がん検診でマンモグラフィや超音波検査を受けることが大切です。触ってわかるしこ

りは2cm以上と言われていて、最も多い発生部位は乳腺の豊富な乳房の外側の上部と言われています。それより小さな早期の乳がん発見には画像検査が有効です。

検診における画像検査には、マンモグラフィと乳房超音波検査があります。マンモグラフィは、乳房専用のX線装置で撮影し乳腺組織の性状を調べるものです。透明の圧迫板で乳房をさみ、薄く伸ばして撮影します。圧迫時には多少の痛みは避けられませんが、少ない放射線量で病変と正常部分の区別がつきやすい画像を作るため必要です。石灰化の描出にすぐれており、しこりを作らないおとなしい早期の乳がんの発見に有用です。ただ若年層などでは乳腺が発達しているため正常な乳腺組織のなかにある乳がんを区別して見つけることが難しいことがあります。



検診

乳房超音波検査は超音波を乳房に当て、その反射波を画像化する方法です。マンモグラフィに比べて小さなしこりを発見でき、乳腺の発達している人でもしこりを発見しやすなどの長所がありますが、乳腺量の少ない方などの石灰化は描出することが難しいなどの弱点もあります。お互いに相補しながら診断することが必要となります。

女性の12人に1人が罹患するという事実から乳がんを他人事と思わずに、ぜひとも乳がん検診をお受けになることをお勧めします。

